小池辰雄著作集 第五巻 『百世の師ヒルティー』

ヒルティーの人間観

──晩年の著作をめぐって──

神経衰弱について（ÜBER NEURASTAENIE）（１８９７年出版）

「同一の人間が善をなし得ると同時に極悪をも犯しかねないということがどうしてありうるのか。しかも枚挙にいとまがないくらいしばしば、同一の人間のうちにこの二つのものが隣り合わせに並存している。そして両者を区切る分水嶺は極めて狭い。あたかも澄んだ湖と濁った湖との、アルプスの二つの湖水から流れ出る水が次第に離れて行って、しまいには二つの異なる大洋に流れこむようなものである。これらの事物における日常の経験に対して、われわれの教育の力全体も何と無力であろう！……今日神経衰弱（ノイラステニー）と呼ばれているものに限らず、偏執病（パラノイア）、妄想病、精神錯乱と呼ばれているものまでもが、一般に信じられているよりはどんな人間にも身近なものであり、従って絶えずこれを遠ざけるようにしなければならない」。

ヒルティーが問題としていた一九世紀末の頃の社会状況より、現代ははるかに深刻な精神的危機の時代といわざるを得ない。神経衰弱（ノイラステニーはギリジャ語のノイロン＝「神経」とアステネイア＝「衰弱」から来ている合成語）や一般的な表現の神経病（ノイローゼ）、ヒステリー、癲癇、時折見かける躁鬱病、特に鬱的現象は普通の人でもややもすると起きるようだが、その他精神の不安定性、酒を飲むとその不安定性が歴然とあらわれ、カッと怒ったり、無闇に笑ったり、変にからんで来たり、といったことは、よく見うけられるところである。

こういった神経の多岐的現象も要するに精神と肉体のいろいろな内的関係や状況、周囲の環境や人間関係に起因するところであろう。そういった問題はヒルティーも論及してはいるが、医学的、特に精神病学的な専門のことはヒルティーも医学者ではないから、その論の当否を私は知らないが、彼が、神経病の問題もその深い原因は精神、こころの在り方から来ると見ていることは真理であると思う。

「かかる精神異状から人類を救い出し、人類全体がすでにはなはだしく失ってしまったところの精神、肉体の健康に対する感覚や理解力をさしあたり再び作り与えることこそ、キリスト教成立期におけるその主要な課題であった。当時の病状を書き記したいろいろなものを見ると、現代のものと驚くばかりに似かよっているのである」。

神経衰弱が生ずる過程としてヒルティーは次のようなものを挙げている。

「それは最初は肉体的な、予防できる原因から起こっている。怠惰、アルコール、とりわけあらゆる性的障害、まちがった見解、たちのわるい読書、誤った教育、きちんとした仕事をしないただのお上品な寄食生活、怪しからぬあるいは不倫な性向、正しい観念や正しい充分な労働の欠如、不断の過労等がその最初の因となりがちである。それに加えてなお、健康なものにも不健康なものにもおしなべて存する或る種の遺伝的素質が因となることもある。」

いかにもヒルティーの言う通りだと思う。神経衰弱へのこれらの諸因に対する時機を得た抵抗、自制が極めて肝要である。そうでないと次第に道義心が欠けて来て、生活に対して無気力、無関心、無責任といった所謂三無主義的精神状況となり、それが既に神経衰弱の徴候であるわけである。それのみでなく、「残忍、醜悪、背理、卑猥、嫉妬、悪意」といった諸悪へと精神の異質な頽落を来たしたりする。

ヒルティーは更にダーウィンの進化論やマルクスの無神論的唯物論や、ニーチェの権力意志的哲学論と因果関係を成す精神的乃至肉体的異常性、危険性などにも論及している。そしてこういっている。

「自己の肉体をもたえず純潔にかつあらゆる汚辱から自由に保持しようと努め、ありふれた官能的存在よりも一段と立派なかつ尊敬すべきものに高めようと心がける人間だけが、自己の精神を純潔に、あらゆる汚辱から自由に保持しうるであろう。肉体の醇化は、肉体を精神活励の一つの完璧な道具となすものであるから、これなくしては、精神の肉体に対する支配などはそもそもありえようはずがない。」

しかしそのような健全なる精神と健全なる肉体の関係はいかにして現実となり得るかという問題になると、どうしても宗教的な力の世界に入らなくてはならないことになる。神経衰弱という症状が医学的に説明され、その起因が解明されても、それで神経衰弱が治るわけではないことは自明で、問題は精神力を現実に支える根源の実在に触れるか否かに関わる。

ところでヒルティーが、精神力といってもそれが自力的なものではなく他力的なものであることに着目しているのが大切な点である。すなわち彼はこう申している、

「福音書中にはむしろ弱者の優越を確言している個所がそれこそ数知れずある。そしてまた、史上最も活動的であった福音の先駆者や継承者たちが、いちじるしく精神上および肉体上の弱点から全く免れていなかったことは、最も大きな実例によってたやすく論証されるだろう。のみならず旧約聖書においてさえもすでにひんぴんと、健康そのものもまた超自然的影響を受けやすいどころか、その影響に左右されるもの、従って霊（精神）的な方途によって獲得されたり、失われたりする付与物であると記述されている。」

ヒルティーは諸欠陥、弱点の例証として、出エジプト4･10、第一コリント2･3、9･22、第二コリント1･8、9･7、12･7～10、詩篇14、7･10～11、33･17、35･10等を挙げている。更に使徒パウロを「拡大性偏執症」があったとか、古代の預言者、詩人、哲学者の大部分にもそういう傾向があったとかいう説を必ずしも否定していない。

「偉人は例外なく、その青年期にはときどき憂鬱症であった」

とさえ彼はいっている。ルターにもゲーテにもそういう時間があった。また超自然的な力の影響については、出エジプト15･26、33･26、申命記7･15、第二コリント16･12、イザヤ60･29～31、マタイ9･12などを挙げているが、聖書には枚挙にいとまないほどである。

ところで常人において、自然的な力が最もよく保持されるためには、「神の掟に従った理性的な生活」といっている。ここに「神の掟」（ゴッテス・ゲボーテ）といっている言葉は、むしろ「神の言」と言った方がいいだろう。要するに聖書につたえられている神の啓示的な言のことである。神の言に従う従順な態度は最も健全な在り方であるからである。それを「信従」といえば適切であると思う。こういう平常の健全な心の在り方を忘れて、事態かおかしくなってから湯治だの、薬用だの、休養だの、と応急的なことをしてもそれは本質的な治癒にはならないことを彼は述べている。

「精神の力が肉体を支配する。なぜなら精神の力は、非常に多くの場合に、病的な肉体の素因を、少くともそれが極めて有害な働きをするのを排除するから。……将来の医学もまた体力の保持と再生のこのような精神的手段に一層大きく注目するに至るであろうことは微塵の疑いもない」

と彼は明言している。現代の医学者たちが果してそのことに本当に気がつき、それを医学上の重要なポイントとして掘りさげているかを私は知らない。私の感じでは医者自身が宗教的なたましいとなって、その実力を体験していなければ無理な気がする。

またヒルティーは俗悪な社交が、非常に不健康であることを挙げているが、酒やたばこや女の渦巻いているような交りがそうであることは論を俟たない。楽しい健全な社交はいいが、「孤独は人間にとって最大の不幸である」といったカーライルの意見にヒルティーは反対している。勿論絶対的孤独、たとえば牢獄の独房の如きは、神との交りがなければ人を狂気に追いやるであろう。大自然を相手としたり、読書の世界に沈潜している孤独は、いい加減な社交よりはるかにたましいを豊かにするものである。これに反して、コマーシャリズムの氾濫しているテレビの、特に幼少年少女に対する精神的公害や、多くの俗悪な諸雑誌に中毒、麻痺しているような現代日本青年の一般状況はどういうものか。神経衰弱への道をたどっているのではなかろうか。

ヒルティーが最も強調している健康法は、「働くこと」である。それを解明してみれば、学生は人生の目的をもって勉強することであり、成人は定まった職業をもって規則正しく働くことである。天賦を自覚して、天職に励むところに、神経衰弱などののぞきこむすきはないであろう。

しかしまた人間の社会は複雑であり、怪奇ですらある面があるから、ことはそう簡単でもない。いろいろな運命環境、交際上の変化が起る。そんなときにこれに自在に対処し得るためには、真に神の前に平伏して、キリスト（仏教なら仏陀）と直結しているたましいであることが何といっても最も肝要な一点である。たましいがここに焦点を結んでいる限り、どんなことがあっても、その現実に対処し、乗り切り、運命環境に天国を現じてゆくことができる。炎々として燃える不滅の天的愛がそこに現ずるからである。

不幸や苦悩すら、そのような生命力には逆に役立つとヒルティーも喝破している。「幸福」論者ヒルティーの「幸福」をこの世的な「しあわせ」ととりちがえてはならない。

苦難や苦悩の中にすら歓喜はあることを彼は語っているし、使徒たちも皆そのことを聖書の中で語り且つ証している。聖書の人物は、神の、キリストの、旺盛な生命力にあずかって歓喜しているから、あらゆる苦難を突破した。要するに神経衰弱は信仰衰弱から来る可能性といって過言でないであろう。

詩人ダンテもあの苦悩、苦難を通して書いた大詩篇を「喜曲」といった。ベートーヴェンも一時は自殺せんとしたほどの耳聾の苦難を担いながら大歓喜の第九交響曲をものした。

「幾百万の人々よ、相抱けよや！

この接吻を全世界に及ぼせ！

はらからよ！　星の幕屋の彼方には

愛の御父ぞ住み給う」

というシラーの「歓喜に寄す」の詩句を高らかに唱わしめている。ベートーヴェンの烈々たる人間愛に現実をもって応えない人類が、いくら年末にこれを演奏したところでベートーヴェンもシラーも知らん顔ではないだろうか。（第二巻「芸術のたましい」に「歓喜に寄す」の全訳を掲げておいたので御参考までに。）

神仏の霊的現実をいい加減にしている二十世紀がどうなってゆくか。天に呻きと怒りと、言い難き警告がある。

「およそ神経にとって最も健康なものは、純粋な喜びである。……神経病者や半狂人の大多数に何よりも欠けているものは愛である。」

正にその通りであろう。

その大歓喜のおとずれが、キリスト降誕の際に天からひびいてきた天使の声であった。そしてキリストの実存と全福音の内容である。何ものをも救ってやまない力強い愛である。どんな精神的な問題もなやみも荷なっている十字架の贖罪愛であり、復活の生命力であり、聖霊の無限無量の内実である。

ヒルティーは懇切丁寧に神経衰弱に対する予防や対策を更に語って尽きないが、それらの内容をここに紹介する要はないであろう。

彼が、むしろめずらしく崇高なる芸術や芸術品のことに言及しているのは注目してよい。芸術的な美の世界は、自然界の花と同じく、ひとの心をよろこばせ、たのしませることに大いに役立つことは論を俟たない。

「精神および肉体を極度に高揚する作用をもつ最も気高い生の歓びは、善行であり、そのかぎりでは本来何ぴとも殆ど全く〈歓びのない〉生存を嘆くにはあたらぬはずである」

という言葉は極めてヒルティーらしいものである。

「これが本当の強壮剤で、この強壮剤たる善行をもって、何でもないひそかな生涯を、ベートーヴェンが古今を通じてこの最も美しい曲として歓喜に献げたあの壮大な交響曲に形成することができるのである」

と喝破している。